

## 宮沢賢治をめぐる人々 考

貞光 威

はじめに

宮沢賢治は童話や詩の作者として、教育者として、また農業改良運動の指導者としてなど、幅広い活動を示した人物で、しかも人間関係を大切にしたので、彼と関係のあった人物は多岐にわたり、きわめて数が多い。

本稿は、そのような賢治の幅広い人間関係を把握する一つの手掛かりとして、賢治と交渉のあった人物について、そのかわりを調べたものである。文学者にとどまらず、幼い日に影響を与えた家族や身の周りの人々・恩師・学友・職場の同僚・教え子・詩集や童話集の刊行に関係した人・彼から指導を受けた人などを含めて考えることにする。

体裁としては、「概括」と「人物」の二つの項目に分けて、まず「概括」の項で、その人と賢治とのつながりを要約して述べ、「人物」の項では経歴を紹介したあとで、賢治との関係ができるだけ詳細に述べることにしたい。なお、人名の配列は、五十音順とする。

賢治とのつながりの深さを判定する基準としては、賢治が書簡をしたためている回数、作品などに名前が出ているか否か、賢治のいろいろの年譜や伝記に登場する度数などによって、総合的に判定した。手紙などは実際には書かれていても、いろいろな事情で残らなかったり、たとえ残っても都合があって全集に掲載されない場合があって、この判定の基準は絶対的なものではないが、今回はとりあえず以上のようにして取り上げる人物を決めることにした。

今回の調査には、主に次のような文献を参考にさせてもらった。著者と書名を記して、ここに謝意を表する次第である。

- 『校本宮沢賢治全集』第十三卷（書簡・受信人略歴） 筑摩書房  
『校本宮沢賢治全集』第十四卷（年譜・各種資料） 筑摩書房  
関登久也著『宮沢賢治物語』 昭和三二年 八月 岩手日報  
境 忠一著『評伝宮沢賢治』 昭和四三年 四月 桜楓社  
森狂巳池著『宮沢賢治の肖像』 昭和四九年一〇月 津軽書房  
宮沢清六著『兄のトランク』 昭和六二年 九月 筑摩書房  
原 子朗編『宮沢賢治語彙辞典』平成 元年一〇月 東京書籍

暁烏敏（あけがらす はや）

〔概括〕賢治が一〇歳のとき、夏期仏教講習会で一〇日にわたって説教を聴いた浄土真宗改革派の僧侶。

〔人物〕浄土真宗大谷派の僧侶。明治一〇年（一八七七）石川県の寺、明達寺に生まれた。同二九年（一八九六）に真宗大学に入学、清沢満之らの宗門改革運動に共鳴して学生改革委員となり活動、退学させられた。その後も宗門改革運動にたずさわり、「無尽灯」の編集をした。大正一〇年（一九二一）、故郷の石川県で香草社を起

こし、個人雑誌「薬王樹」発刊した。昭和二六年（一九五一）から二七年まで大谷派本願寺宗務総長。明治三九年（一九〇六）八月、花巻教会の夏期仏教講習会が大沢温泉で一〇日間にわたって開催され、この会に暁烏敏が招かれている。この会は賢治の父の政次郎が中心となっており、賢治も父に連れられてこの講話を聴いた。暁烏の日記には賢治の名前が記されており、いっしょに遊んだり、歌ったり、散歩をしたりしたことも書かれている。暁烏はその後も大正六年（一九一七）五月と同九年七月の二度、花巻に来ている。昭和二九年（一九五四）没。『暁烏敏全集』全三巻がある。

阿部繁（あべ しげる）

〔概括〕花巻農学校における賢治の同僚で、また大正一五年（一九二六）に開設された岩手国民高等学校でも共に講師をつとめた。教師時代の賢治を伝える証人。

〔人物〕明治三一年（一八九八）に岩手県稗貫郡西宮村野目に生まれた。盛岡中学卒業。久慈農業補修学校、遠野実科女学校の教諭を経て、大正一三年（一九二四）一月に花巻農学校に転じ、昭和二一年（一九四六）に岩手県農業会技師となるまで、同校で教諭心得兼舎監として勤務し、養蚕・博物・気象などを教えた。岩手県では大正一五年（一九二六）一月に県教育会・県農会・稗貫郡教育会の共

催で岩手国民高等学校が開設され、賢治は講師として農民芸術を講じたが、阿部も講師として生理衛生を担当した。筑摩書房『宮沢賢治全集』の「月報」九号（昭和三一・一二）に「地人宮沢賢治」と題して、主として岩手国民高等学校時代の賢治の思い出を書いている。

阿部孝（あべ たかし）

〔概括〕卒業後も親しく交際した盛岡中学時代の同級生。

〔人物〕明治二八年（一八九五）生まれ。盛岡中学、一高を経て、大正八年（一九一九）、東大英文科卒。高知高校で教授として英語を教え、のちに高知大学の学長をつとめた。昭和三年（一九五七）退官。阿部孝は盛岡中学時代の同級生で、二人は親しく交際し、卒業した後も、上京した賢治は東大に通う阿部の下宿を訪れ、萩原朔太郎の詩集『月に吠える』を見せられ、一方、阿部は大正一三年（一九二四）の夏休みに花巻に帰ったときには花巻農学校を訪れ、賢治が生徒を指導して上演した「種山ヶ原の夜」を見ている。阿部は賢治の中学生時代についての思い出を記した「二つの歌」（筑摩書房『宮沢賢治全集』「月報」昭和三一・一）などで、賢治は運動神経が鈍かったために軍人あがりの体操教師にどなられることがしばしばあったが、岩手山の登山のときには別人のように元気だった

ことや、その頃から音楽が好きであったことなど、中学生時代の賢治についてくわしく書いている。

石川善助（いしかわ ぜんすけ）

〔概括〕賢治の生前に彼の作品を高く評価して推薦し、雑誌「児童文学」に「北守将軍と三人兄弟」「グスコープドリの伝記」掲載の機縁を作った詩人。

〔人物〕詩人。明治三四年（一九〇一）、仙台生まれ。家は小間物屋の老舗であった。大正八年（一九一九）、仙台市立商業学校卒業。在学中から詩作を始め、同一年に正富洋洋主宰の「新進詩人」の同人となり、同二年には詩誌「感触」を中田伸子らと発行、翌年には郡山弘史らと「北日本詩人」を、その翌年には森佐一らと「L・S・M」を発行した。賢治より五歳年下で、賢治の文学を高く評価していた。賢治を最初に訪れたのは大正十四年（一九二五）であったが、昭和七年（一九三二）一月に、小康状態にあった賢治を再度訪ねており、その後で「児童文学」の編集をしていた佐藤一英に賢治を推薦して、「北守将軍と三人兄弟」「グスコープドリの伝記」掲載の機縁を作った。草野心平、高村光太郎などとも交流があった。昭和七年六月二二日、泥酔して川に落ち死亡。その死に際して賢治は「石川善助を弔む」を書いている。

石田嘉一（いしだ かいち）

〔概括〕 家出して上京した賢治が自活のために勤めた小さな印刷所  
文信社の経営者。

〔人物〕 東京本郷六丁目二番地の小さな印刷所文信社の経営者。文  
信社は大学の講義を謄写版で印刷して学生に売る印刷所であった。  
大正一〇年（一九二一）一月、突然に家出して上京した賢治は、こ  
こに勤めて、朝八時から夕方の五時半まで座ってガリ版切りをした。  
主人の石田嘉一は日蓮宗信者であったが、賢治の関徳弥宛の大正一  
〇年一月三〇日付書簡では、「利害打算の帝国主義者」と揶揄して  
いる。

伊藤克己（いとう かつみ）

〔概括〕 賢治が花巻農学校を退職して羅須地人協会を設立したとき  
の協会員で、合奏の際には第一バイオリンを弾いた。

〔人物〕 羅須地人協会の会員の一人。伊藤は協会のあった下根子の  
近くに住み、賢治が土曜日の夜、青年たちを集めて合奏を始めたとき  
には第一バイオリンを受け持った。伊藤は十字屋版『研究』に  
「先生と私達」という回想を執筆、その中で「或る日の岩手日報の  
三面中段に写真入りで宮沢賢治が地方の青年を集めて農業を指導し  
て居る」と報じたことがきっかけで、集会在不定期になり、羅須地

人協会が解散することになったと述べている。これは昭和二年（一  
九二七）二月一日付同紙夕刊で、「農村文化の創造に努む／花巻の  
青年有志が／地人協会を組織し／自然生活に立返る」の見出しで、  
羅須地人協会の趣旨、内容を紹介したものであったが、思想問題の  
厳しかった当時で、日時不明であるが、花巻警察署の伊藤儀一郎か  
ら事情聴取を受け、社会主義教育を行っていると疑われたのがきっ  
かけで、賢治が農民芸術運動から肥料設計に仕事の重点を移していっ  
たことを指している。賢治の近くにいた伊藤は、音楽を愛した賢治  
が妹のトシと賛美歌をいっしょに歌うのを見たことや、出京しては  
浅草オペラを見てきた話を聞いたことなども述べている。

伊藤清一（いとう せいいち）

〔概括〕 岩手国民高等学校の学生の一人で、そこでの賢治の様子を  
伝えている。

〔人物〕 稗貫郡花巻川口町生まれ。大正一五年（一九二六）に花巻  
農学校に併設の形で開設された岩手国民高等学校の学生の一人で、  
筑摩書房版『宮沢賢治全集』の月報（昭和四三・六）に「岩手国民  
高等学校と宮沢賢治」と題して思い出を書いており、主任の高野一  
司が不在のときには賢治が代理をつとめ、生徒たちの先頭に立って  
指導したことが見える。大正一二年（一九二三）には「国民精神作

興ニ関スル詔書」が發布され、同一五年には「青年訓練所法」が出て、勤労青年に兵式訓練を行うようになる軍国主義の勃興期で、加藤完治は国粹的農本主義の立場で大正四年（一九一五）に山形県自治講習所長としてこのような教育を行い、昭和二年（一九二七）には茨城県友部に日本国民高等学校を創立して、校長となり、満蒙開拓義勇軍の育成に当たった。賢治の自然科学や農民芸術を重視する羅須地人協会の活動は、岩手国民高等学校の体験をもとにして、国粹主義的な行き方に対抗する形で進められたものと見られる。

伊藤忠一（いとう ちゅういち）

〔概括〕 羅須地人協会の設立にもかかわった会員。

〔人物〕 稗貫郡花巻町大字下根子小字桜の羅須地人協会の隣に住んでいた。昭和元年（一九二五）八月に協会が発足したときには会員となり、趣意書を近所に配ったりするとともに、農業・自然科学・農民芸術などに関する講義を受講、ノートを残している。賢治が青年たちを集めて合奏を始めたときにはフルートを受け持った。

伊藤ちゑ（いとう ちゑ）

〔概括〕 賢治が結婚の対象として最も心を動かされた女性。彼が肺浸潤で倒れたため結婚には至らなかった。

〔人物〕 岩手県藤沢郡水沢町（現、水沢市）生まれ。生家は大きな製粉所を経営していた。兄の七雄はドイツ留学中に胸を病み、伊豆大島に土地を買って療養していた。妹のちゑもその世話をするため大島にいた。七雄とちゑの二人は昭和三年（一九二八）の春頃であるるか、月日は不明だが、花巻を訪れている。訪問の表向きの用件は、兄の七雄が大島に農芸学校を作るについて、賢治の意見を聞くことであったが、ほんとうは『注文の多い料理店』の挿絵を描いた菊池武雄の紹介で、ちゑと賢治と見合いをさせることが主な目的であった。この時に賢治は大島を訪ねることを約束し、六月に東京に出たときに足を伸ばして大島元村字野地六五五番地に住む伊藤兄妹を訪ねている。賢治はこの伊藤兄妹に好意を抱いて、ちゑとの結婚を夢見たこともあったらしいが、この年の八月に両側肺浸潤で倒れ、それから二年半にわたって病臥したために立ち消えとなった。賢治が大島行きを歌った詩に「三原三部」があり、第一部は、六月一日付で、東京港から出航する船上からの眺めを、第二部は一日付で、伊藤兄妹のところで土性を調べ、庭園や花壇を設計する様子を、第三部は一日付で帰りの海の風景を歌って、皆明るい詩である。

及川四郎（おいかわ しろう）

〔概括〕 賢治の一級下にあたる盛岡高等農林学校の卒業生で、盛岡

市に住み、『注文の多い料理店』の出版にあたった。

〔人物〕及川と高農で同級の友人であった近森善一が、当時、盛岡高等農林学校の助手をしており、大正一二年（一九二三）七月に『病虫害駆除予防便覧』を、同年一二月に『蠅と蚊と蚤』を及川の家を東北農業薬剤研究所出版部として出版した。これがよく売れたので、翌年には同校教授小熊彦三郎の『果樹園芸教科書』、『蔬菜園芸教科書』を刊行している。その頃に花巻農学校を訪れた近松が賢治から童話原稿を見せられて、それを持ち帰って及川に見せたところから『注文の多い料理店』出版の話になったらしい。ところが、賢治と直接に交渉のあった近松が、父親に選挙の応援のために帰郷するうように言われて高知へ帰ったため、協力者であった及川が刊行の実務を担当することになった。そのために初めは、『注文の多い料理店』は、詩集『春と修羅』の出版される四月に同時に刊行の予定であったが、実際には一二月一日の発行となってしまった。なお、東北農業薬剤研究所出版部は、童話集出版のために、賢治によって光原社と改名された。

大津三郎（おおつ さぶろう）

〔概括〕賢治が羅須地人協会を設立して間もなく、東京に出たときに、オルガンやタイプライターなどとともにチェロの個人教授を受

けた。その時、賢治にチェロの演奏を指導した音楽家。

〔人物〕トロンボーン奏者。明治二五年（一八九二）生まれ。同四年に海軍軍楽隊に入隊、大正三年（一九一四）に海軍省委託の弦楽専修生として二年間、東京音楽学校（現、東京芸術大学音楽学部）で学んだ。チェロは信時潔に習ったという。大正九年に退役したのち、山田耕筰、近衛秀麿の指揮する日本交響楽団にトロンボーン奏者として参加、日響内紛の際には近衛に従って新交響楽団設立に加わった。以後、トロンボーン奏者、楽譜を扱う図書係として活躍した。昭和三二年（一九五七）没。賢治は大正一五年（一九二六）三月に花巻農学校を退職して、夏には羅須地人協会を設立、農学校の卒業生らと器楽合奏も始めた。この年の一二月二日、賢治はチェロを持って上京、二九日まで東京に滞在するが、この間に三日間だけチェロを習った。それを教えたのは、新交響楽団のトロンボーン奏者で、チェロも弾けた大津三郎であった。おそらく、オルガンの練習に通った塚本商行という楽器店の社長の子次郎が、その店の二階で新交響楽団が練習をしていたところから、楽団員でチェロも弾けた大津三郎に話をつけてくれたのであろう。大津三郎の「私の生徒 宮沢賢治―三日間セロを教えた話―」（音楽の友）昭和二七・一）によれば、レッスンの時間は朝の六時半から八時半までの二時間、ウェルナー教則本の第一巻のやさしいところを弾いて聞かせ

たり、弾かせたりしたという。どうしてこんな無理なことを思い立ったかと大津が聞くと、賢治は「エスペラントの詩を書きたいので、朗誦伴奏に思っただけでオルガンを練習しましたが、どうもオルガンよりセロの方が良いように思いますので……」と答えたという。

尾山篤二郎（おやま とくじろう）

〔概括〕賢治の親戚筋にあたる関徳弥の短歌の指導にあたった歌人で、関に頼まれて、『注文の多い料理店』の出版に際して、背文字の揮毫、東京の出版社の斡旋などをした。

〔人物〕明治三二年（一八八九）石川県生まれ。金沢商業学校中退。一五歳のとき右脚を大腿部から切断したので、学業を離れた。室生犀星らと交友して文学への関心を深めた。多くの歌集がある。『大伴家持の研究』の業績により日本芸術院賞を受賞。賢治の父の政次郎の従弟にあたる関徳弥は、若いときに賢治の歌稿を読んだのが機縁で短歌を作るに至り、尾山篤二郎に指導を受けていた。関は賢治の父の政次郎の従兄弟にあたり、賢治を兄のように尊敬していた。その賢治から『注文の多い料理店』の出版にいろいろと頼まれることの多かった関が尾山に相談、尾山は表紙に用いる布の入手、東京の出版社、関根書店への斡旋、背文字の揮毫など協力を惜しまなかった。

河本義行（かわもと よしゆき）

〔概括〕盛岡高等農林学校の賢治より一年後輩で、賢治や保阪嘉内らと同人誌「アザリア」を刊行した。

〔人物〕明治三〇年（一八九七）鳥取県東伯郡社村（現、倉吉市）に生まれた。大正五年（一九一六）倉吉中学を卒業、盛岡高等農林学校第一部に入学した。賢治より一年後輩にあたる。中学時代から俳誌の「層雲」に属して、自由律俳句を作った。俳号、緑石。大正六年、賢治・保阪嘉内らとともに同人雑誌「アザリア」を発刊、俳句や詩などを発表した。卒業後は倉吉に帰り、大正一一年に伊奈北農商学校、翌年には倉吉農学校で教員を勤めた。倉吉では前田寛治らと同人誌「砂丘」を発刊、詩を中心に発表した。詩集に『詩集』（大正五）・『幻に咲く花』（大正二二）・『夢の破片』（大正二四）がある。昭和に入って句作に熱心となり、鳥取出身の自由律の俳人尾崎放哉の研究に打ち込んだ。昭和八年（一九三三）に水泳の訓練中、溺れそうになった同僚を助けて、自身は犠牲となった。没後に『大空放哉伝』と句集『大山』が刊行された。

菊池信一（きくち しんいち）

〔概括〕花巻農学校・国民高等学校における賢治の教え子で、羅須地人協会・石鳥谷肥料相談所などでも賢治と深くかかわった人物。

〔人物〕明治四二年（一九〇九）に稗貫郡好地村石鳥谷（現、石鳥谷町）に生まれた。大正一一年（一九二二）入学の花巻農学校における賢治の教え子。大正一三年八月一〇日に同校で上演された賢治作の「飢餓陣営」には特務曹長の役で出た。岩手国民高等学校でも教えを受けた。卒業後も互いに文通をして教えを受け、羅須地人協会の運動にも熱心に協力し、石鳥谷肥料相談所の世話をし、賢治の肥料設計に協力している。自身でも水稲のほかにブドウ・リンゴ・花卉などを栽培し、田屋農園の名を用いて販売した。「石鳥谷肥料相談所の思い出」という文章を十字屋版の『研究』に書いており、岩手国民高等学校や石鳥谷肥料相談所での賢治の活動の証言をしている。昭和一二年（一九三七）に二回目の応召をし、北支戦線観城の戦いで斥候に出て襲われ戦死した。賢治が菊池信一に宛てた書簡一〇通が全集に見える。

菊池武雄（きくち たけお）

〔概括〕藤原嘉藤治の友人で、賢治の『注文の多い料理店』の装丁と挿絵を担当、賢治に伊藤ちゑとの縁談を取り持ったり、鈴木三重吉のところへ賢治の童話を斡旋、昭和六年に賢治が上京して病臥したときには、八幡館に駆けつけて介抱した。

〔人物〕図画の教師。明治二七年、江刺郡稲瀬村（現、江刺市）生

まれ。大正五年（一九一六）岩手県師範学校を卒業。盛岡城南小学校に八年つとめたのち、大正一三年に福岡中学校に転じ、図画を担当した。このころ師範学校時代の同級生の藤原嘉藤治の紹介で、賢治の『注文の多い料理店』の装丁と挿絵を頼まれた。菊池は辞退したが、職業画家でない方がよいと、賢治は菊池の仕事を励ました。

大正一四年に上京、西巢鴨第二小学校、四谷第六小学校で図画を教えた。上京した菊池は深沢省三方に下宿し、深沢を通じて賢治の童話を「赤い鳥」の鈴木三重吉に斡旋したが、三重吉は採らなかった。大正一五年に三重吉の媒酌で結婚。巢鴨の新居を賢治は訪ねている。菊池が知人であった伊藤ちゑの兄嫁に賢治の話をしたことから、賢治に結婚の話が持ち上がり、賢治も心が傾いたのであったが、賢治が病に倒れたので実現に至らなかった。昭和六年（一九三一）九月に賢治が上京の途中で発熱、宿の八幡館に着くと同時に病臥したとき、四谷第六小学校の菊池に電話があり、彼は八幡館に駆けつけて世話をした。晩年は吉祥寺で洋装店を経営した。昭和四九年（一九七四）没。賢治が菊池武雄に宛てた書簡四通が全集に見える。

草野心平（くさの しんぺい）

〔概括〕賢治の生前から彼の詩を激賞し、自身の主宰する雑誌に同人として誘い、没後は全集の編集、賢治に関する研究やエッセイを



出版して、賢治を世に紹介する上で大きな功績のあった詩人。

〔人物〕 詩人。『定本蛙』『第百階級』などで蛙を歌った詩人として知られる。明治三六年（一九〇三）福島県石城郡上小川村（現、いわき市）に生まれた。慶応普通部中退。中国広州の嶺南大学（現、中山大学）に在学中の大正一三年（一九二四）に友人から詩集『春と修羅』を送られて賢治を知った。翌年に中国人の黄瀛らとともに詩誌「銅鑼」を創刊、帰国後、賢治を同人に誘い、賢治は四号から一三号までに一三編の詩を発表した。昭和一〇年（一九三五）詩誌「歷程」を創刊、創刊号に物故同人として賢治の詩一編を掲載した。心平は賢治と文通を続けたが、相見ることにはなかった。心平は賢治の生前から彼の作品を激賞し、没後は賢治を世に紹介する上で功績があった。『宮沢賢治追悼』（昭和六）、「宮沢賢治研究」（昭和一〇年一月創刊、第五・六合併号まで）を発行したほか、『宮沢賢治全集』（文圃堂・十字屋・筑摩書房昭和三二年版・同四二年版）を編集、『宮沢賢治覚書』（昭和二六）、「わが賢治」（昭和四五）など賢治についていろいろと書いている。昭和六三年（一九八八）没。

葛博（くず ひろし）

〔概括〕 賢治が大正七年に従事した稗貫郡の土性調査を依頼した、当時の稗貫郡長。

〔人物〕 大正七年（一九二二）当時の稗貫郡長。葛はこの年の四月に盛岡高等農林学校教授の関豊太郎に正式に文書をもって稗貫郡の土性調査を依頼した。これは、農作物の栽培には土地の性質を知るのが先決であるとして、郡長であった葛が調査を依頼したものである。そこで関が指導主任となり、同校の助教の神野幾馬と、この年の三月に同校を卒業し、研究生となった賢治とが調査を担当することとなり、賢治は四月から九月までかかって、熱心に調査を行った。葛は十字屋版『研究』に載った「宮沢賢治君を憶ふ」と題する文章で、「山野を跋涉して難儀して土性調査に従事し乍ら旅費も弁当も絶対に受取らず、暇で覚えた事で郡の為に働く事は当然だといふて不相変丸飯持参で働いて呉るのには余り気の毒で困り抜き候。勿論手当ては受取らずに終り申候」と、賢治がこの仕事を無償で行ったことを書いている。この時に神野幾馬といっしょに行った土性調査の様子は、賢治の短編小説「泉ある家」や「十六夜」に描かれている。大正一〇年（一九二二）になって賢治は稗貫農学校の教諭に迎えられるが、校長の畠山栄一郎が採用を決定したのには、郡長の葛博ほかの推薦も力があったと考えられる。

工藤藤一（くどうとういち）

〔概括〕 盛岡高等農林学校で賢治より一年後輩で、寄宿舎自啓寮で

同室であった。岩手県立農事試験場の技師となる。賢治は彼の指導を受けにしばしばここを訪れた。

〔人物〕旧姓、原戸。明治三一年（一八九八）兵庫県印南郡上荘村（現、加古川市）に生まれた。兵庫県立明石農学校を卒業して盛岡高等農林学校農学科第二部に入学した。その時に入った寄宿舎自啓寮南寮第七室の室長が二年生の賢治であった。大正八年（一九一九）に盛岡高農を卒業し、東京西ヶ原の国立農事試験場に一年間勤務した後、岩手県立農事試験場の技手として勤務、昭和一八年（一九四三）には場長となった。同二一年退職。彼が岩手県立農事試験場にいた頃に、賢治はしばしばここを訪れ、農業技術の指導を受けるとともに、石灰の試験もしてもらった。工藤の著書に『稲作肥料設計法』がある。工藤は、寄宿舎自啓寮時代の賢治について回想して、「先輩宮沢賢治さんの思い出」（『陽光』昭和二一・五）、「宮沢賢治さんの思い出」（『四次元』七五号 昭和三一・四）などを書いていく。全集に収められた二通の賢治の書簡は、賢治の東北砕石工場時代に石灰の試験をしてもらい、指導を受けた時のものである。

黄瀛（こう えい）

〔概括〕『銅鑼』同人の詩人で、賢治にただ一人会った中国人。

〔人物〕中国の詩人。一九九三年（明治二六）中国四川省重慶生まれ。

れ。青島日本中学を卒業して来日、文化学院、陸軍士官学校卒業。大正一四年（一九二五）には広州で草野心平が創刊した『銅鑼』の同人となり、日本の詩人たちと親しく交わり、詩を書いた。詩集に『景星』（昭和五）、『瑞枝』（昭和七）などがある。帰国後は国民政府軍の南京参謀本部に勤めた。昭和二四年の春、陸軍士官学校の卒業旅行で東北・北海道地方を回り、花巻温泉に一泊したときに暇を見つけて賢治の家を訪れており、その思い出を「南京より」（三一年版全集『研究』）に書いている。

小林六太郎（こばやし ろくたろう）

〔概括〕宮沢家の者が世話になった東京神田の化粧品卸問屋の主人で、賢治もこの家に泊まった。政次郎は上京中の賢治に金を届けるとき、小林宛に送金し、彼から賢治に必要なだけ渡してもらった。

〔人物〕卸売商。長野県小諸の出身。曾祖父の代に西洋ろうそくを発売し、「だるまろうそく」の名で全国的に販売していたが、後には薬品、化粧品類を扱うようになり、宮沢家を通じて岩手県下にも卸していた。大正時代には東京日本橋本石町で化粧品問屋を営んでいて、宮沢家と親交があり、賢治もこの家に泊まったり、上京の際に父親の政次郎から商用を頼まれたりしている。大正一五年（一九二六）一二月に上京して神田錦町の上州屋に止宿して、エスペラン

ト・チェロ・タイプライターなどを学んだ折には、父の政次郎が小林に二〇〇円預け、必要があるたびに二〇円くらいずつ賢治に渡してもらっていたことが、大正一五年二月一五日付の政次郎宛の賢治書簡によってわかる。

斎藤宗次郎（さいとう そうじろう）

〔概括〕熱心なキリスト教徒で、賢治と信じる宗教は違ったが、共に信仰に篤く、音楽・園芸など趣味も一致して、レコードを聴きながら人生や文学などについて話し合った人物。

〔人物〕明治一〇年（一八七七）、稗貫郡笹間村（現、花巻市）の東光寺の住職轟木東林・サダの三男として生まれ、同二四年に斎藤武二郎の養子となり、花巻に住んだ。養家は財産家であったが、養父の代に没落。岩手県師範学校に学び、在学中に内村鑑三の『地人論』を読んで感銘を受けてクリスチャンとなった。花巻の里川口小学校に赴任したが、当時、内村は国賊と非難されていて、キリスト教信者への迫害がひどく、斎藤も石を投げられることたびたびで、結局、小学校を休職させられた。その後、新聞書籍販売店「求康堂」を経営、新聞の配達も自分で行った。求好堂は鑑三の命名である。賢治と宗次郎とは信仰は異にしたが、お互いに立場を尊重し、教育や文学を論じたり、レコードを聴いたりしている。斎藤の日記によ

ると、大正一五年（一九二六）三月、学校でレコードを聴いたあとで、賢治は退職して羅須地人協会の新活動に入る決意を斎藤に告げ、「農民芸術概論」の序文を読み、批評を求めている。斎藤も園芸を好み、花城小学校・花巻高女・花巻駅などの花壇を受け持って美化につとめ、賛美歌をはじめ音楽を愛したので、二人は気が合って、新聞などの配達をすませた斎藤と賢治は、話をしたり、レコードを聴いたりすることが多かった。斎藤も大正一五年九月に、かねてからの念願を果たすために上京し、伝道に従事し、内村鑑三の詳細な伝記を完成した。斎藤は生涯にわたって克明な日記をのこし、昭和四三年（一九六八）九〇歳で没した。

佐々木喜善（ささき きぜん）

〔概括〕柳田国男に『遠野物語』（明治四三）の原話を提供した民話の収集者。賢治と交際があり、賢治は佐々木を尊敬していた。

〔人物〕明治一九年（一八八六）岩手県下閉伊郡土淵村（現、遠野市）生まれ。岩手医学校を中退、東京本郷の哲学館に学び、早稲田大学高等師範部聴講生となる。はじめ、短歌、詩・小説を作ったが、柳田国男に『遠野物語』（明治四三）の原話を提供したのを機に民俗学に関心を深め、故郷で民俗資料の調査収集に努め、土淵村村長をつとめるかたわら、『奥州のザシキワラシの話』（大正九）、『江刺

郡昔話』大正一一）、『老嫗夜譚』（昭和二）、『聴耳草紙』（昭和六）

を刊行した。晩年は仙台に住んで、独力で雑誌『民間伝承』を発刊したが、二号で終わった。昭和二年（一九二七）四月と七年五月の二回、賢治を訪問しており、賢治の民俗学に対する関心を刺激した。賢治は佐々木宛に四通の書簡を残している。生前、賢治は佐々木のことを繰り返し語ったむね母木光は伝えている。賢治の童話「ざしき童子のはなし」は佐々木の「奥州ザシキワラシの話」の影響が感じられ、そのほかにも、『聴耳草紙』の様々な動物にまつわる民話を読むと、賢治の動物にまつわる民話風な童話には佐々木の收拾した民話の影響を受けている可能性が強いと考えられる。昭和八年（一九三三）没。

佐藤惣之助（さとう そうのすけ）

〔概括〕『春と修羅』が出版されたとき、この詩集の価値を認めて最初に批評した詩人。

〔人物〕詩人。明治三三年（一八九〇）神奈川県生まれ。暁星中学仏語専修科卒。少年の頃から詩を創作、人道主義の影響を受け、「テラコッタ」を千家元麿・高村光太郎らと、「エゴ」を元麿と発刊した。『正義の兜』（大正五）、『狂へる歌』（大正六）、『琉球諸島風物詩集』（大正一〇）、『颯風の眼』（大正一一）など二二冊の詩集が

ある。詩誌「詩の家」を発刊して詩人の育成に努めたほか、流行歌の作詞も行った。賢治が大正一三年（一九二四）四月に『春と修羅』を出版したとき、最も早い時期にこの詩集を高く評価して批評を書いた一人で、賢治自身もそれに感じ入っていたことが翌年二月九日付、森荘巳池宛の賢治書簡によってわかる。惣之助の詩集『正義の兜』などに見られる饒舌体の詩風は、賢治の『春と修羅』の一部に見られる詩風と共通する。

佐藤隆房（さとう たかふさ）

〔概括〕賢治の晩年の病気の診断や助言に当たった医者で、賢治の言行録的伝記『宮沢賢治』の著者。

〔人物〕医者。花巻共立病院院長。結核を病んだ晩年の賢治の主治医は花巻共立病院の内科医長の佐藤長松であったが、重要な診断や助言は、前から父の政次郎と親しかった院長の佐藤隆房が当たっていた。昭和一七年（一九四二）に佐藤は富山房から『宮沢賢治』を出したが、これは賢治の伝記の最も早い時期のものであると同時に、政次郎など宮沢家一家と親しく交際し、賢治の晩年に診察や助言に直接当たっていたので、賢治やその周辺の者の言行を詳しく記録しており、賢治のその後に書かれた伝記の基礎となった。

沢里（高橋） 武治（さわさと たけじ）

〔概括〕 賢治に音楽的才能を期待された花巻農学校における教え子。

〔人物〕 教師。旧姓、高橋。明治四三年（一九一〇）、岩手県稗貫郡湯本村（現、花巻市）生まれ。大正一四年（一九二五）、花巻農学校に入学、昭和三年（一九二八）に同校を卒業、岩手県師範学校に入学、同校を卒業後、現在の遠野市などの小・中学校の教員を勤めて、昭和四五年（一九七〇）、遠野市の上郷中学校長を最後に退職した。農学校時代に賢治に音楽的才能を期待され、バイオリンを贈られ、教員となってからも、「風の又三郎」の「どっどど どど」の歌の作曲を頼まれて苦心したが成らず、そのことを報告しに行ったときの賢治の落胆ぶりを知って、師範学校専攻科に入って音楽を学びなおした。彼は休暇のたびに羅須地人協会を尋ねて助言を受けている。賢治の彼に宛てた書簡が一六通ある。

島地大等（しまじ だいとう）

〔概括〕 賢治が法華経の信仰を深めるきっかけとなった『漢和対照

妙法蓮華経』の著者。賢治は盛岡市の願教寺で彼の説教も聴いており、インド・ネパールなどの探検に参加した彼からその知識も得た。

〔人物〕 浄土真宗の僧侶。仏教学者。明治八年（一八七五）新潟県生まれ。明治三二年（一八九九）京都西本願寺大学林高等科卒。同

三五年、盛岡市北山の浄土宗寺院の願教寺の島地黙雷の法嗣となり

入籍、住職となった。仏教大学、東洋大学の講師を経て、大正八年（一九一九）に東京大学講師となり、同一五年にはインド哲学第三講座を創設、華嚴・天台教学の権威となった。著書に『仏教大綱』『天台教学史』『日本仏教学史』などがある。賢治が法華経の信仰を深めるきっかけとなった『漢和対照妙法蓮華経』（大正三）は大等の著。賢治は明治四五年（一九一二）の夏に北山の願教寺の仏教講習会で大等の法話を聴いている。大等は明治三五年（一九〇二）から三六年にかけて大谷光瑞の探検隊の随員として、セイロン・インド・ネパールの仏蹟調査に加わっており、賢治の童話「インドラの網」や「雁の童子」などに見られるような、インドや西域方面に関する関心や知識は、願教寺における夏期仏教講習会などでの大等の説教などから得た可能性が高い。

白藤慈秀（しらふじ じしゅう）

〔概括〕 花巻農学校時代に親しく交わった賢治の同僚。

〔人物〕 明治二二年（一八八九）花巻生まれ。本名、林之助。花巻農学校における賢治の同僚で、物理・体操・国語などを担当した。京都平安仏教専修学校卒。さらに岩手県師範学校を卒業した。小学校訓導を経て、大正一〇年（一九二一）稗貫農学校教諭となった。

同一五年、賢治と同じ年に退職。盛岡北山の願教寺は仏教学者の島地大等が住職であったが、大学に勤め、東京にいたことが多かったので、白藤が院代をつとめた。賢治が媒酌をつとめた藤原嘉藤治の結婚式は白藤のこの寺で行われた。後に正式に住職となった。文語詩「洪積の台のはてなる」に「このときに教諭白藤／灰いろのイムパネス着て」、また「氷質の冗談」には「白淵先生 北緯三十九度 辺まで／アラビヤ魔神が出て来ますのに／大本山からなんにもお触れがなかったですか」「白淵」は「白藤」もじり、と出ている。「宮沢賢治の生活諸相」（十字屋版『研究』）などの賢治の回想を書いており、賢治の近くにいた人物だけに教師時代の賢治の様子を詳しく伝えている。昭和五一年（一九七六）没。

鈴木東蔵（すずき とうぞう）

〔概括〕賢治が晩年に勤めた石灰を製造販売する東北砕石工場の経営者。

〔人物〕明治二四年（一八九一）岩手県東磐井郡長坂村（現、東山町）生まれ。小学校を卒業して、一七年間、長坂村役場に勤めた後到大正二二年（一九一三）ごろから砕石事業を始め、同一四年から大船渡線陸中松川駅前まで東北砕石工場を経営した。昭和四年（一九二九）の春、花巻の渡嘉肥料店に注文を取りに来て賢治のことを知

り、そのころ病臥中の賢治と会った。賢治は乞われて同六年二月二一日に、年俸六〇〇円で、説明文および広告文の起草、炭酸石灰に関する研査ならびに改良、照会についての回答、岩手・青森・秋田・山形県下における宣伝を担当することを正式に契約し、父の政次郎も五〇〇円を出資している。政次郎は、教師をやめてしまった賢治が実業にたずさわるように望んでいた。会社は賢治の応援を得て、その後は注文が増えたが、賢治は販売店獲得のために上京の列車の中で発病、遺書も書いており、病身での無理が彼の命を縮める結果になった。賢治の東蔵宛の書簡は一一九通におよぶが、ほとんどが石灰製品をめぐるものである。東蔵には『農村救済の理論及実際』（大正一〇）、『理想郷の創造』（大正九）の著書があり、賢治が晩年に病身に鞭打って、この仕事に痛ましいほどの努力をした裏には、東蔵の理想主義的な面に共鳴したという一面もあったと考えられる。

鈴木三重吉（すずき みえきち）

〔概括〕賢治は三重吉の主宰する「赤い鳥」を愛読したが、三重吉は賢治の童話の価値を認める眼力を持たなかった。

〔人物〕小説家。童話作家。雑誌「赤い鳥」の編集者。賢治は雑誌「赤い鳥」を創刊号から読んでおり、児童の自由芸術運動に関心をもち、共鳴していた。ところが、三重吉は賢治の童話を認めなかつ

たようである。堀尾青史の『年譜宮沢賢治伝』によると、挿絵を書いた菊池武雄は大正一四年（一九二五）に『注文の多い料理店』が出版されると、これを三重吉に送ったが反応がなかった。翌年の春に上京して、岩手県出身で「赤い鳥」の挿絵を描いていた深沢省三を介して三重吉と面識を得た。そこで菊池は賢治から童話原稿を送ってもらって、三重吉に見せた。それは「タネリはたしかにいちにちかんであるたやうだった」であった。それを讀んだ三重吉は、「君、おれは忠君愛国派だからな、あんな原稿はロシアにでも持っていくんだなあ」と言って返したという。しかし、三重吉は『注文の多い料理店』の広告を無料で「赤い鳥」に載せてやろうとしたらしい。菊池がそのことを賢治に知らせると、賢治から広告の文案を送ってきた。それには、「ご希望の方はお知らせ下さい送本いたします。お読みになっておもしろかったら代金をお送りください」とあった。三重吉は「誰が読んでしまったら面白いと金を送ったりするものか」といって、サッサとそこを消してしまったという。賢治と三重吉との性格の違いを示して妙といえよう。三重吉は昭和一年（一九三六）に没した。

関（岩田）登久也（徳弥）（せき とくや）

〔概括〕賢治と親戚関係にあり、賢治を尊敬し、国柱会にも同時に

入会した。賢治の没後は彼の伝記研究に従事。

〔人物〕歌人。賢治の伝記研究者。本名、徳弥。登久也は筆名。明治三二年（一八九九）花巻川口町（現、花巻市）で関徳太郎の次男として生まれた。徳太郎は賢治の祖父の喜助の妻キンの異母兄で、徳弥は賢治の父の政次郎の従弟にあたる。小学校では賢治の妹のトシと同級で、ともに模範生として表彰された。大正一二年（一九二三）に岩田金次郎の長女ナヲと養子縁組し岩田姓となる。金次郎の妻ヤスは政次郎の妹、長男の豊蔵は賢治の妹シゲと結婚している。関は賢治を兄のように尊敬し、国柱会へも賢治と同時に入会した。若いときに賢治の歌稿を讀んだのがきっかけで短歌を作るようになり、尾山篤二郎に師事した。尾山が賢治の詩集『春と修羅』の初版本の背文字を書いたのは、関の仲介による。関は賢治の影響で熱心な法華経信者となり、賢治が始めた法華経輪読会にも加わった。関宛の賢治書簡は三通にとどまるが、他の者に宛てた書簡にもしばしば関の名前が見える。歌集に『寒峽』（昭和八）、賢治の評伝に『宮沢賢治物語』（昭和三三）、『宮沢賢治素描』（昭和四五）などがある。賢治研究誌「農民芸術」（昭和二一年創刊、八号まで）、「宮沢賢治研究」（昭和三三年創刊、一七号まで）を主宰した。昭和三二年（一九五七）没。

関豊太郎（せき とよたろう）

〔概括〕盛岡高等農林学校の教授で、気難しい人物であったが、賢治とは妙にウマが合い、賢治にことのほか目をかけた。

〔人物〕地質・土壌学者。慶応四年（一九六八）東京生まれ。東京帝国大学農科大学農学科卒業。中学校、師範学校、農学校、高等師範学校の教師を経て、明治三八年（一九〇五）盛岡高等農林学校に教授として着任、明治四三年（一九一〇）から大正二年（一九一三）までドイツ・フランスに留学し、大正六年（一九一七）に火山灰土壌の研究で農学博士となる。専門は土壌学で、賢治の入学当時は農学科第二部の部長をつとめ、物理・物理実験、気象・地質・鉱物・土壌を担当した。学者タイプの厳格で気難しい人物であったが、賢治とはウマが合い、賢治にことのほか目をかけた。稗貫郡の土性調査には、賢治を助手にし、調査と報告の一切を賢治に委任し、賢治が辞退したために実現は見なかったが、彼を助教に推薦しようともした。賢治が農民に勧めた、田畑への石灰岩粉末の散布も、関がドイツ留学中に知ったことであるといわれる。大正九年（一九一〇）に盛岡高農を退職し、東京西ヶ原の国立農事試験場の嘱託となった。昭和三〇年（一九五五）没。

平来作（たいら らいさく）

〔概括〕花巻農学校の教え子で、羅須地人協会にも参加した愛弟子。八月一〇日、一日に農学校で賢治の指導で上演された学校劇「飢餓陣営」には主役のバナナン大将として出た。同年五月に北海道へ修学旅行に行ったときには、賢治の引率で、彼の作った「精神歌」や「黎明行進曲」を大声で歌いながら札幌の大通り公園を横一列になつて行進したことを関登久也に語っている。大正一四年（一九二五）三月に農学校を卒業。羅須地人協会にも参加し、家のある湯本村（現、花巻市）から八キロの道を通い、この年の冬に行つたベトーベン百年祭にはレコードの交換など助手の仕事をしている。彼の書いた賢治についての回想に「ありし日の思ひ出」（十字屋版『研究』）があり、関登久也の『続宮沢賢治素描』には「平来作氏聞書」が収められている。

高瀬露（たかせ つゆ）

〔概括〕賢治が花巻農学校を退職して羅須地人協会の活動を始めたころ、彼と結婚しようとする情熱をもやした女性。

〔人物〕明治三四年（一九〇一）生まれ。大正一三、一四年（一九二四、五）ころ、花巻の西隣の湯口村の宝閑小学校の教師であった。



花巻農学校の生徒募集や農事講習会の会場に、この小学校を借りることがよくあったので、賢治も訪れていて、二人は顔見知りであった。また、花巻高等女学校で土曜日の午後にはしばしば行われていた、藤原嘉藤治を中心とする、音楽を演奏したり、レコードを聴いたりする音楽の集いにも出席していて、賢治も農学校の授業がすむと出ていたから、会う機会が多かった。クリスマスチャンで、明るく率直な人柄であったという。大正一五年（一九二六）、賢治が農学校を退職して、下根子桜で独居自炊の生活を始めると、彼女は近くの向小路に住んでいたところから、食事をこしらえたり、掃除をしたりし、羅須地人協会の集まりにお茶や菓子接待もした。協会の会員には女性がいなかったので、オルガンが弾ける高瀬は、劇の稽古や音楽の練習などに欠かせない存在でもあった。義理固い賢治は、世話になるとすっかりお礼をせずにはいなかったもので、それを高瀬は好意と信じたらしい。一人合点でどうしても結婚しようと思つに至った。これを苦にした賢治は、門口に「不在」と書いたり、押し入れに隠れたり、夜も電灯をつけないで過ごしたりした。この女性との問題は、彼女が言って回ったこともあって、かなりうわさにのぼり、賢治の父の政次郎の耳にも入った。父は「おまえの苦しみは自分で作ったことだ。はじめて女のひとにあったとき、おまえは甘いことばをかけ、白い歯を出して笑ったろう。それがそもその起りだ」と戒

めたという。しかし、この問題は、賢治が病臥するようになって、自然とおさまった。賢治が高瀬に送った書簡は残っていないが、その下書きが残っていて、全集におさめられている。高瀬はその後、他の男性と結婚をした。昭和四五年（一九七〇）没。

高知尾智耀（たかちお ちよう）

〔概括〕国柱会の常任理事で、大正一〇年に無断で家を出た賢治が国柱会館を訪ねたとき、応対して、創作によって法華経の精神を弘めるように勧めた人物。

〔人物〕明治一六年（一八八三）、千葉県山武郡公平村（現、東金市）生まれ。東京専門学校（現、早稲田大学）哲学科を卒業。福島県磐城中学校に英語の教師として八年間在職、その間に、明治四三年（一九一〇）、静岡県清水市の三保の最勝閣で行われた、田中智学の第一回本化仏教講習会、翌年の第二回講習会に参加して入信を決意し、その年に立正安国会（国柱会の前身）に入会した。大正三年（一九一四）国柱会の創立に際して、山川智応の招きに応じて、磐城中学校を辞して本化大学準備会教授として国柱会に勤めた。以後、田中智学を助けて、国柱会理事、講師となった。大正一〇年（一九二一）に無断で家を出た賢治が鶯谷の国柱会館を訪ねたときに応対したのが高知尾で、賢治に文芸によって大乘仏教を弘め

よと勧めたのが契機となって、賢治は童話の創作に猛然と取りかか  
る。『雨ニモマケズ手帳』には「◎高知尾師ノ奨メニヨリノ法華文  
学ノ創作」と記されている。賢治の書いた、高知尾宛の昭和八年  
(一九三三)の年賀状が残っている。

高橋秀松(たかはし ひでまつ)

〔概括〕盛岡高等農林学校の一年生のとき賢治と寄宿舎で同室とな  
り、親交を結んだ。

〔人物〕明治二九年(一八九六)、宮城県名取郡増田町(現、名取  
市)生まれ。宮城県立農学校を卒業して盛岡高等農林学校農学科第  
一部に入学した。一年生のとき賢治と寄宿舎で同室となり、たびた  
び山野を歩き回った。大正七年(一九一八)、盛岡高農を卒業後、  
茨城県立農業教員養成所兼農学校教諭を勤めた。同九年に京都大学  
経済学部専科に入学し、同一二年に卒業して安田保善社に勤務した。  
昭和一九年(一九四四)に故郷に帰り、農協関係役員や名取町長を  
勤めた。賢治が高橋に宛てた一三通の書簡が全集に見える。盛岡高  
農のころの賢治を回想した「寄宿舎での宮沢賢治」(筑摩版『全集』  
月報九号)という文章を書いている。

高村光太郎(たかむら こうたろう)

〔概括〕賢治と同じく人道主義の詩人で、賢治だけでなく弟の清六  
とも親しく、戦火にあって宮沢家に疎開した。賢治の全集の編集に  
深くかわり、羅須地人協会の跡の「雨ニモマケズ」の詩碑も彼が  
揮毫した。

〔人物〕詩人。彫刻家。明治一六年(一八八三)、東京生まれ。彫  
刻家高村光雲の子。東京美術学校を卒業後、アメリカ、フランスに  
留学してロダンに傾倒。帰国後は、彫刻のかたわら短歌や詩を作り、  
「スバル」同人となり、「パンの会」にも参加した。その耽美的な詩  
風からやがて理想主義に転じ、『道程』(大正三)で人道主義的な口  
語自由詩を完成した。この頃に長沼智恵子を知る。彼女への愛や、  
彼女の発病から死までを歌った『智恵子抄』(昭和一六)の美しさ  
は、賢治の妹トシの死を歌った、「永訣の朝」をはじめとするトシ  
子挽歌群と並ぶもので、広く愛読されている。賢治は大正一三年  
(一九二四)の『春と修羅』刊行の際には光太郎に進呈しており、  
昭和元年(一九二六)一月一八日には東京千駄木に光太郎を訪問  
している。同八年(一九三三)の母木光宛の賢治書簡に、「高村氏  
草野氏等同人雑誌を作るとの事私例によって遁げました」とあるの  
は、「歷程」への参加を呼びかけられたものである。同二〇年(一  
九四五)六月に光太郎の東京のアトリエが戦災に遇い、光太郎は花

巻の宮沢清六方に疎開したが、八月には清六宅も罹災し、その後は七年間にわたって稗貫郡太田村山口の小屋で独居自炊の生活を続けた。光太郎は文圃堂版、十字屋版、読書組合版の三種の賢治の全集の編集に参加、さらにこの三種と第一次筑摩版の全集の題字を書いている。昭和十一年（一九三六）に花巻市下根子桜の羅須地人協会の跡に建てられた「雨ニモマケズ」の詩碑も光太郎の揮毫である。光太郎が賢治について書いたものには、「コスモスの所有者宮沢賢治」（草野心平編『宮沢賢治追悼』昭和九）、「宮沢賢治に就いて」（『宮沢賢治研究』第二号 昭和一一）、「宮沢賢治の詩」（『婦人の友』昭和一三・三）、「玄米四合の問題」（『農民芸術』第三号 昭和二一・四）などがある。昭和三二年（一九五六）に七五歳で没。

#### タッピング (Henry Tapping)

〔概括〕賢治がバイブル・クラスで講義を聴いた盛岡バプティスト教会の牧師。

〔人物〕牧師。ヘンリー・タッピングは一八五七年にアメリカ合衆国ウィスコンシン州で生まれた。プロテスタント系バプティスト派宣教師として来日し、明治四二年（一九〇八）から大正九年（一九二〇）まで盛岡バプティスト教会の牧師を勤め、布教のかたわら盛岡中学で囑託として英語を教えた。賢治は盛岡高等農林学校一年の

とき同級生の出村要三郎を誘って、タッピング牧師のバイブルの講義を聴いている。タッピング牧師は大正九年（一九二〇）に横浜に移って、関東学院（現、関東学院大学）創設に貢献した。文語詩の「岩手公園」には、「『かなた』と老いしタッピングは杖をはるかにゆびさせど」とヘンリー・タッピングを歌っているほかに、その妻で盛岡幼稚園の創設者であるジェネーヴのことを「老いたるミセスタッピング」、息子のウィラードのことを「大学生のタッピングは」、妻の姉のヘレンのことを「去年なが姉はここに」と歌っている。この詩のほかに、童話「ビヂテリアン大祭」や短歌にもこの牧師の名が見える。賢治の妹のトシは日本女子大学の在学中に英語の検定にパスしていたので、盛岡高等女学校の教諭となった彼女は家事と英語を担当したが、彼女は英語の発音の不完全さを気にして、月曜日には盛岡に出て、宣教師のタッピングから英語の発音を習った。昭和一七年（一九四二）没。

#### 田中智学（たなか ちがく）

〔概括〕賢治が熱烈に帰依した日蓮系の在家仏教運動家で、その宗教団体、国柱会の創設者。

〔人物〕文久元年（一八六一）、江戸日本橋生まれ。本名、巴之助。幼いときに父母を失い、明治三年（一九七〇）九歳のときに日蓮宗

の妙覚寺で得度し、智学の法号を受けた。飯高檀林で学んだ後、同八年には日蓮宗大教院に進んで、新井日薩に教えを受けた。同九年に病気のために退学、在学中から抱いていた日蓮宗学に対する疑問を解くために妙覚寺に戻って独学で仏典の研究に励み、明治一三年（一八八〇）、横浜に蓮華会を興し、同一七年（一八八四）、東京に出て立正安国会を樹立、同二七年（一九九四）、国柱会を創設した。従来の日蓮宗の摂受を中心とした比較的に穏やかな行き方に飽き足らぬ智学は、脱宗還俗して在家仏教の立場で、折伏を中心とした積極的な活動を展開し、純正日蓮主義を唱え、立正安国をめざした。彼の教義は、明治四四年（一九一一）に起こった大逆事件を契機に国家主義と結びついて、天皇崇拜、国体護持の思想傾向を強めた。当時の国柱会は、本部を静岡県三保の最勝閣に置き、東京での活動拠点として鶯谷に国柱会館を設け、日刊紙「天業民報」などを発刊していた。大正九年（一九二〇）一二月の保阪嘉内宛の書簡で賢治は、「今度私は国柱会信行部に入会しました。即ちもはや私の身命は日蓮聖人の御物です。従って今や私は田中智学先生の御命令の中に丈あるのです。」「田中先生に妙法が実にはつきり働いてゐるのを感じ、今や日蓮聖人に従ひ奉る様に田中先生に絶対に服従致します。」と異常とも見える熱烈な傾倒を見せている。その頃の賢治は、「天業民報」を家の前に掲示板を作って掲示したり、花巻地方に多い真

宗の信者に対して折伏を試みたりしている。このようなファナティックな行状には、質屋の長男として将来を閉ざされた賢治の懸命な反抗の変形と見ることもできる。智学は昭和一四年（一九三九）に没した。

近森善一（ちかもり ぜんいち）

〔概括〕盛岡高等農林学校における賢治の後輩で、花巻農学校を訪ねた近森が、賢治から童話の原稿を見せられて童話集の発行を決意したが、家の事情で盛岡を離れたので、実務は友人の及川四郎が担当した。

〔人物〕盛岡高等農林学校で賢治より一級下で、『注文の多い料理店』の発行当時は同校の助手をしていた。盛岡高農の同級生で友人の及川四郎と共同して事業を興すことにし、害虫駆除の薬剤の製造販売を始め、その宣伝普及のために及川の家「東北農業薬剤研究所出版部」を置いて、大正一二年七月に『病虫害駆除予防便覧』、同年一二月に『蠅と蚊と蚤』というパンフレットを刊行した。薬剤もパンフレットも良く売れ、その後も、同一三年二月には盛岡高農の教授であった小熊彦三郎の『果樹園芸教科書』と『蔬菜園芸教科書』を刊行している。その頃、賢治の勤める花巻農学校を注文を取るために訪ねた近森が、賢治から童話の原稿を見せられて持ち帰り、

及川に見せたところから出版の話になったらしい。このように近森は賢治の『注文の多い料理店』の刊行に大きな役割を担った人物であるが、父親の選挙のために郷里の高知県に帰ってしまったので、実際の童話集発行の仕事は、彼の友人の及川四郎が担当した。〔「及川四郎」の項参照〕

富手一（とみて はじめ）

〔概括〕 稗貫農学校の第一回の卒業生で、花巻温泉株式会社の園芸部主任となり、花壇の設計造営、植木の植栽などで賢治の指導を受けた。

〔人物〕 明治三十九年（一九〇六）、稗貫郡湯本村大畑生まれ。稗貫農学校の第一回の卒業生で、卒業後は自分の家の農業に従事していたが、大正一三年（一九二四）から昭和一三年（一九三八）まで花巻温泉株式会社に園芸部主任として勤め、花壇の設計造営、花木の植栽などで賢治の指導を仰いだ。賢治は詳細な設計書や必要な花の苗の表などを作って送っただけでなく、賢治自身が花壇に花を植えることも多かった。花巻温泉の中央通りには、賢治が設計し命名した南斜花壇、大きな日時計を仕掛けた日時計花壇が残る。また、賢治の設計どおりの南斜花壇が、昭和六三年（一九八八）に賢治記念館の入り口に復元された。賢治の、造形芸術としての花壇に対する

情熱を示す富手宛の賢治の書簡が全集に四通載っている。

長坂（川村）俊雄（ながさか としお）

〔概括〕 稗貫農学校の教え子で、賢治が学校で上演した劇に主役をつとめ、賢治に喜劇の天才とたたえられた。

〔人物〕 旧姓、川村。大正一一年（一九二二）三月、家が貧しいために進学ができなかったが、稗貫農学校に受験に来た友人について来て校庭で遊んでいた長坂は、第一日目の国語の試験の監督をしていた賢治に呼び止められて、試験を受けることになり、四月に入学した。賢治は長坂に学資を得させるために一枚五銭で原稿の浄書を書せるなど面倒を見た。大正一二年五月の創立記念日に、賢治が脚本を書いて演出した劇「植物医師」の主役をつとめ、賢治に『春と修羅』の中の詩「風林」において「喜劇の天才」と称賛されている。賢治に深い恩義を感じている長坂は、後に「イーハトーヴォ農学校の頃」（「イーハトーヴォ」復刊第三号 昭和三〇・二）という回想を書いたり、ラジオやテレビなどに出たりして、いろいろな機会に農学校時代の賢治についての思い出を語っている。

畠山栄一郎（はたけやま えいいちろう）

〔概括〕 賢治が着任した当時の稗貫農学校の校長。磊落な人物で、

賢治にのびのびと教師として活動する場を与えた。

〔人物〕賢治が着任した当時の稗貫農学校（のちに花巻農学校と改称）の校長。この学校は、明治四五年（一九一二）五月に蚕業講習所として開所し、賢治が着任する大正一〇年（一九二二）四月に稗貫郡立稗貫農学校に昇格したばかりであった。校長、教員四名、書記、ほかに剣道師範一名という小さな学校で、畠山自身も修身・法制経済・畜産・林学などを教えた。あけっぴろげで明朗闊達な人柄で、校長も教師も書記も同じ部屋にいて、賢治が学校劇をやっても、スクエアダンスをやっても、レコードコンサートをやっても、おおらかに見ていた。大正一三年八月一〇・一一日の両日に行われた、賢治の指導のもとに同校の生徒が出演した農民劇試演は観客が約三百名集まったが、そこで畠山は、挨拶し、農村と娯楽、学校劇と農民劇について話をしている（同月一三日付「岩手日報」）。畠山は賢治が花巻農学校を退職する四か月前、大正一四年一月に転任した。新しく校長に着任した中野新佐久は校長室を作って、何事にも管理を厳しくしたので、賢治をはじめ多くの者が反発したという。

藤原嘉藤治（ふじわら かとうじ）

〔概括〕花巻高等女学校の音楽の教師で賢治の親友。花巻高等女学校は花巻農学校のすぐ隣にあったので、藤原と賢治とは互に行き

来して、啓発しあい、肝胆相照らす仲だった。

〔人物〕明治二九年（一八九六）、紫波郡水分村小屋敷（現、紫波町）生まれ。大正五年（一九一六）、岩手県師範学校を卒業、気仙郡広田小学校、盛岡仙北小学校を経て、盛岡城南小学校訓導となった。大正一〇年九月から花巻高等女学校教諭となり音楽を担当、昭和八年（一九三三）同校を退職、嘱託となる。翌年、嘱託を辞して上京、小学校の代用教員となり、同一四年には日本青年団の書記となった。第二次世界大戦後、帰郷して、紫波郡の東根山麓開拓団長として入植して農業に従事した。昭和五二年（一九七七）没。賢治の勤める稗貫農学校（のち花巻農学校と改称）は女学校の隣にあつたし、花巻高等女学校には賢治の妹のトシが家事と英語の教師として勤めていた。藤原は専門である音楽のほかに、詩にも秀で、草郎と号して、師範学校在学中から詩を雑誌や新聞に投稿しており、雑誌「文章世界」に三木露風の選で詩が載ったり、元日の「岩手毎日新聞」に「東北の冬」と題する長詩が一ページを埋めたりした。藤原と賢治との交渉は、賢治が花巻高等女学校の音楽の教師である藤原を女学校の宿直室に、自分の書いた詩を批評してもらうために訪ねたことに始まる。『春と修羅』第二集の序文には、「藤原嘉藤治・菊池武雄などの勤めるままに、この一巻をもちどみなさまのお目通りまで捧げます」とある。しかし、藤原は賢治の詩を深く理解す

るには至らず、二人の交際は主として音楽を中心に行われた。藤原は賢治に楽典を教え、賢治は藤原にドイツ語を教えるという形の交換教授を行った。藤原に会ってからの賢治は、レコードの収集、鑑賞を中心に音楽熱がとみに高まった。藤原が宿直の晩には芝生に椅子を持ち出して、藤原が賢治にバイオリンやチェロを演奏して聞かせたらしいことが、花巻高等女学校における藤原の教え子の回想に見える。藤原は当時、花巻でストリングクォルテットを組織して、彼はチェロを弾いていた。藤原は五〇円で買った穴のあいたのを持っていた。「セロ弾きのゴージュ」に「セロもずいぶん悪い」とあるのは、それを反映している。それに対して、賢治のチェロは一八〇円のスズキ製であった。盛岡公会堂で藤原が演奏会するのに、穴のあいた、良い音が出ないチェロではと、賢治が取り換えてやっていった。昭和二〇年の花巻空襲のとき、賢治の生家も罹災し、五〇円のチェロも灰と化した。藤原のところにあった賢治が買ったチェロは無事だった。そのチェロは、今、花巻の宮沢賢治記念館で見ることが出来る。文語詩「塀のかなたに」には、「塀のなかに嘉菟治かも／ピアノぼろろと弾きたれば」とある。また、詩「空明と傷痕」は藤原のことを歌ったもの。昭和二年（一九二七）に、賢治は藤原の小野キコとの結婚の媒酌をしている。全集には賢治の書いた藤原宛書簡が五通ある。

保阪嘉内（ほさか かない）

〔概括〕 若い頃から文学や宗教に関心が深く、盛岡高等農林学校では寄宿舎で同室となり、また「アザリア」の同人として親交を結んだ。盛岡高農を去ったのちも書簡の往復は頻繁だったが、法華経への入信を迫る賢治と、信仰だけでは現実には救われぬと考える保阪は再会して論争した後で決別した。嘉内との別れが童話『銀河鉄道の夜』のモチーフであるとする説がある。

〔人物〕 明治二九年（一八九六）、山梨県北巨摩郡駒井村（現、韭崎市）の地主の家に生まれた。甲府中学校を卒業し、大正五年（一九一六）、盛岡高等農林学校農学科第一部に入学、寄宿舎では一年上級の賢治が室長をしている部屋に入った。中学生の頃から短歌を作り、文芸・宗教の方面に関心が深く、賢治と親交を結んだ。その年の五月には寄宿舎の自啓寮の懇親会で、保阪の書いた脚本で劇を上演、賢治も全智の神ダークネスの役を演じている。同六年、賢治・小菅健吉・河本義行らと同人誌「アザリア」を刊行、その中心となって活躍した。同七年三月、三年生への進級を前に、退学を命じられた。「アザリア」第五号に載せた文章「社会と自分」が過激思想として問題にされたものらしい。その後も賢治と保阪との手紙のやりとりは続いている。傷心のうちに学校を去った保阪は、東京に出て北海道大学の受験を目指したが、六月に母を亡くして断念、帰郷し

て、農耕生活に入った。その後、山梨県教育会、新聞社などに勤めたり、上京して農村の青少年の指導を志したりしたが、胃ガンのため昭和十二年（一九三七）に没した。賢治の死から四年後である。

賢治が嘉内に宛てた書簡は全集に七二通に及ぶ。その多くは、賢治が「保阪さん、みんなと一緒にでなくても仕方ありません。どうか諸共に私共丈でも暫くの間は静に深く無上の法を得る為に一心に旅をして行かうではありませんか」などのように、法華経信仰の道を共に進もうと呼びかけたものである。ところが、盛岡高農に入学するとき、保阪は、農学を修めて故郷に帰り、村長となって土地を改良し、副業を興して多角経営を図り、共同組合組織を基盤にした模範農村を築くことを思い描いていたほどで、現実の農村を直視する傾向が強く、賢治の勧めには応じなかった。二人は、大正一〇年（一九二一）七月一八日に再会を果たすが、法華経こそが人々を幸いに導く本当の道だと信じて入信を迫る賢治に保阪は反対し、信仰上の問題で決別する。ジョバンニとカムパネルラとの悲しい別れが描かれている『銀河鉄道の夜』のテーマについて、妹のトシとの別れが底流となっていることを指摘する向きが多いが、菅原千恵子『宮沢賢治の青春——ただ一人の友 保阪嘉内をめぐって——』（平成六・八 宝島社）は、賢治と嘉内との別れがモチーフになっていると考えており、注目される。賢治の羅須地人協会への活動には、保阪

の模範農村建設の理想に影響を受けた可能性がある。

堀籠文之進（ほりごめ ぶんのしん）

〔概括〕盛岡高等農林学校における賢治の後輩で、稗貫農学校（のち、花巻農学校）にいっしょに勤め、親交を結んだ教師。

〔人物〕教師。明治三二年（一八九九）、宮城県黒川郡大衡村生まれ。宮城県立仙台第二中学校を経て、盛岡高等農林学校を大正一〇年（一九二一）に卒業し、四月から稗貫農学校教諭となり、農業・園芸・英語などを担当、舎監も兼ね、昭和二年（一九四六）まで花巻農学校に在職、戦後は久慈農林学校、千厩高等学校・紫波高等学校の校長を歴任して昭和三三年に退職し、花巻市に在住した。堀籠は賢治より三年後輩ではあるが、同じ盛岡高農の出身で、農学校に賢治が着任する前から在職していたので、二人は親しく交際し、賢治は堀籠の結婚の世話もしている。詩「小岩井農場」の下書稿に「堀籠さんは温和しい人なんだ／あのまっすぐない、魂を／おれは始終をどしてばかり居る」とある。

母木光（ははき ひかる）

〔概括〕賢治のごく晩年に指導を受けた地元作家で賢治の研究者。  
〔人物〕小説・童話作家。本名、藤本光孝。母木光はペンネーム。



昭和九年（一〇三四）からは儀府成一のペンネームも使用。明治四二年（一九〇九）、岩手郡御所村（現、雫石町）生まれ。昭和七年（一九三二）四月に『岩手詩集』を編集して出版した。この出版について賢治に同五年九月以来協力してもらったので、そのお礼を兼ねて、刊行の翌月に初訪問、翌八年にも訪問している。八年の春という賢治が世を去る数カ月前であるが、母木の編集する雑誌「天才人」第六号に賢治は童話「朝に就きての童話的構図」を寄せている。母木は同年九月二二日の賢治の通夜にも関徳弥や藤原嘉藤治らとともに参っている。賢治を回想したものに「最初と最後の訪問」（筑摩版『研究』）、「回想」（十字屋版『研究』）などがある。著書に『人間宮沢賢治』（昭和四六）、『宮沢賢治―その愛と性―』（昭和四七）がある。賢治が母木に送った書簡が『全集』に一五通のっている。

宮沢イチ（みやざわ いち）

〔概括〕賢治の母で、実家は花巻きっての富裕な商家であった。明るい性格であったという。

〔人物〕賢治の母。明治一〇年（一八七七）生まれ。父、宮崎善治、母、サメの長女。実家は花巻川口町（現、花巻市）鍛冶町にあり、善治は塩・砂糖・タバコ・石油などを広く扱って富を築き、県下で

一、二を争う多額納税者であった。イチは明治二八年に宮崎政次郎と結婚して、二男三女を生んだ。昭和三八年（一九六三）に八六歳で没。家族も多く、使用人もかかえていた宮沢家を明るく切り回し、笑顔を絶やさなかったという。大正十一年（一九二二）には娘のトシを、昭和八年（一九三三）には賢治を失うという不幸に見舞われた。賢治の伝記を語るとき、賢治と父親の政次郎との関係が問題にされて父は表に出ることが多く、それに比してイチはその蔭に隠れがちであるが、賢治の作品のあちこちに見られるユーモアは、母イチの明るい性格がはぐくんだもので、賢治の性格形成に重要な役割を果たしたと見られる。

宮沢（刈屋）主計（みやざわ かずえ）

〔概括〕まず賢治が知って、賢治の要請に応じる形で妹のクニと結婚した。経済に明るく、賢治の父の政次郎の信頼を得ていた。

〔人物〕明治三六年（一九〇三）、岩手県下閉伊郡茂市村大字墓目（現、新里村）に刈屋善六、ナカの次男として生まれた。岩手県庁勤務。昭和二年（一九二七）三月、羽田正の紹介で初めて賢治と会い、交わりを深め、賢治の要請に応じる形で同年一月に妹のクニと婚約、翌年九月に入婿となり結婚した。この頃、賢治は病臥していたので、式や披露宴には出られなかった。昭和四年に県庁を退い

て賢治の弟の清六とともに家業に従事し、同六年には政次郎の命で東北砕石工場の経営を助けた。同一四年（一九三九）稗和自動車専務、同一八年岩手中央自動車会社専務、同三年（一九四八）花巻バス社長となる。『雨ニモマケズ手帳』に記された「この夜半おどろきさめ……」で始まる詩は、昭和四年（一九二九）二月に主計とクニとの間に生まれた、長女フヂが風邪をひいて咳をして苦しむのを階下で聞いて、その苦しみを代わりたいと大梵天王に訴えた詩で、この詩には、その頃の主計・クニ・フヂの一家の様子が良く出ている。

宮沢クニ（みやざわ く）

〔概括〕 兄思いの、賢治の末の妹。

〔人物〕 宮沢政次郎・イチの三女で、賢治の末の妹。明治四〇年（一九〇七）生まれで賢治より一歳年下。大正二年（一九一三）、花巻高等女学校、一三年、同補習科卒。昭和三年（一九二八）、刈屋主計と養子縁組し、政次郎一家と同居した。同年一二月に賢治が病に倒れ、病臥したときには、新婚生活を営んでいた二階の部屋を賢治の病室にするために別棟の階下西向きの部屋へ移った。昭和四年に生まれた長女フジについては、『雨ニモマケズ』手帳に、フジが風邪で咳をして苦しむのを代わってやりたいと賢治が願った思い

を記した詩がある。また、昭和八年八月三〇日に、賢治がこのフジを描いたスケッチが残っている。クニには主計との間に三男三女がある。森荘巳池の『野の教師』によれば、クニは大正一〇年（一九二一）一四歳のときに、姉のシゲといっしょに賢治に連れられて岩手山に登ったらしい。

宮沢シゲ（みやざわ しげ）

〔概括〕 賢治より五歳年下の妹。姉のトシが早世したので、賢治の思い出を尋ねられることが多く、多くの賢治に関する聞き書きに、シゲの話が出てくる。

〔人物〕 宮沢政次郎・イチの二女で、賢治の二番目の妹。明治三四年（一九〇一）生まれ。関登久也の家の二階で行った法華経や日蓮の遺文を読む集まりに、賢治に誘われて姉のトシとともに出席したこともあったが、賢治の信仰に理解を示したトシとはちがって、大正九年（一九二〇）の賢治の国柱会への入会の頃から激しさを増した賢治と父の政次郎との信仰上の争いを、はらはらしながら見るにとどまった。姉のトシが、花巻高女に就職して間もなく発病して病臥するようになった際には、シゲは大正十一年に親戚の岩田豊蔵と結婚していたが、岩田家の承諾を得て、トシの病室となった下根子桜の別宅に夜も泊まって看病に当たった。賢治についての思い出を

語ったことばが、森莊巳池や関登久也などの聞き書きにしばしば見える。

宮沢清六（宮沢 せいりく）

〔概括〕賢治の童話原稿を出版社に持参して交渉、賢治の死後は原稿などの保存、整理に努力し、全集刊行のたびに編集に加わった賢治の弟。

〔人物〕明治三十七年（一九〇四）生まれで、賢治より八歳年下の弟。大正十一年（一九二二）に盛岡中学を卒業後、家業を手伝ったが、質・古着商という家業に賢治と同様に深い嫌悪を感じ、暗い日々を送った末、同年十二月、両親の了解を得て、東京の研数学院で数学や電気を学んだ。翌年三月に東京蔵前の東京高等工業学校電気科を受験して合格したが、父から進学についての了解が得られず、花巻に帰った。同一三年、一年志願兵として弘前の連隊に入隊し、大正一五年三月、見習士官で除隊した。同年五月、建築・金物・自動車部品を扱う宮沢商会を開業した。昭和七年（一九三二）四月二六日、花巻町里川口の橋本伝七・トクの五女、橋本アイと結婚した。第二次大戦後、民生委員・児童委員などをつとめた。戦前、戦中、戦後を通して、賢治の原稿を保存、整理にあたった。特に昭和二〇年（一九四五）八月に賢治の生家が戦火に罹災した時には原稿や資料

の保存に大変な努力を払った。これまでに出了すべての全集の編集に参加している。賢治にまつわる数多くの思い出を書いており、それをまとめた著書に『兄のトランク』（昭和六一 筑摩書房）がある。大正一二年、研数学館で学んでいた頃に、下宿先へ、花巻から上京した賢治が原稿のいっばいに詰まった大きなトランクを下げて訪れ、その原稿を出版社に持って行って交渉するように依頼、清六がそれを「婦人画報」「コードモノクニ」を発行していた東京社に持ち込んだが、婦人画報編集部で童話や小説も書いていた小野浩に、うちの雑誌には向かないからと掲載を断られている。賢治は死の前日に、父に対しては、自身の童話などの原稿について、迷いの跡だから適当に処分してくれるようにと言ったが、その夜、用心のため側に寝た清六に対しては、原稿はみんなやるから、どこかの本屋で出してくれたら、どんな小さな本屋でもよいから出版してくれ、出すといっただけでなかったら、無理に働きかけないで、手元に持っているようにと言ったという。賢治の父と清六に対して言った話に違いがあるが、これは父は賢治の信仰や文学を否定し対立していたのに対し、清六は兄を支持し協力しつづけてきた。そのために、父と話したときには、作品は迷いの跡という正論を吐いたが、そう言いつつも心の底には自身のこれまで心を傾けてきた作品を世に残したい気持が捨てきれず、清六には本心を告げたものと考えられる。賢

治が世を去った当時は、彼の文学はほとんど世に知られず、あまり理解されなかった。それが今日のように広く世に知られ、きわめて多くの人々に愛されるようになったのは、賢治の作品に深い愛情を持ち、賢治の好んだ文学や音楽などに深い理解を寄せて、賢治のために一生を捧げたとも言える清六をはじめとする周囲の人々の献身の賜物と言わねばならない。清六は今年四月一日に九三歳を迎える。賢治の清六宛の書簡が全集に六通おさめられている。

宮沢トシ（みやざわ とし）

〔概括〕賢治が「信仰を一つにするたったひとりのみちづれ」と考えた最愛の妹で、単なる妹の域を超えた深い精神的な存在であった。「人物」政次郎・イチの長女で、賢治より二歳年下の妹。賢治の作品には「とし子」と出てくるが、戸籍上はトシ。明治三二年に日本女子大学校家政学部予科に入学、翌年本科生となる。在学中に賢治とトシの間には頻繁に手紙の往復があった模様であるが、今は残らない。大正七年（一九一八）、卒業学年である本科生三年の時の一二月に肺炎のために東京大学付属病院小石川分院（永楽病院）に入院して、急いで上京した賢治の看護を受けた。三学期をすべて欠席したが、成績優秀のため見込点がつけられて卒業が認められ、同八年三月賢治とともに花巻に帰った。そのあとの静養中に、トシは

賢治の短歌を整理し清書している。翌年九月、母校の盛岡高等女学校の教諭心得となり、英語と家事を担当した。英語の発音の不完全さを気にかけて、毎週月曜日に盛岡パプティスト教会の牧師ヘンリー・タッピングから発音を習った。賢治の法華経信仰にも理解を示し、この頃に彼が中心となって関徳弥らと行っていた法華経の輪読会にトシも出席したらしい。大正一〇年（一九二一）年六月に発熱して床につき、九月には咯血し、九月二日付で退職して療養につとめる。この年の一月から、無断上京して自活しながら国柱会の活動に加わっていた賢治は、九月に「トシビョウキスグカエレ」の電報を受け取って急いで帰宅した。トシは一年あまりの療養のかいもなく同一一年一月二七日に、結核のため、二四歳で死去した。賢治の詩「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」はその衝撃と悲しみを歌っている。「無声慟哭」で賢治は「信仰を一つにするたったひとりのみちづれ」と言っている。翌一二年の夏に賢治は青森・北海道を経て樺太に行っているが、これは「たったひとりのみちづれ」であるトシを捜し求めている旅ともいえ、その心情は「青森挽歌」「オホーツク挽歌」「噴火灣」を含む、いわゆるトシ子挽歌群に歌われている。その樺太旅行の延長線上に「銀河鉄道の夜」はあり、この作品をはじめとして、後期の賢治の作品の多くのものにトシが深く影を落としている。賢治のトシ宛の書簡が全集に五通おさめられている。ト

シが日本女子大学校在学中に賢治と交わした書簡は伝わらない。

宮沢政次郎（みやざわ まさじろう）

〔概括〕宮沢商店の経営者として堅実な腕をふるったが、同時に熱心な仏教徒で、その方面の知識も深かった。法華経を信じた賢治は父に反発しつつも、尊敬も忘れなかった。

〔人物〕賢治の父。宮沢喜助・キンの長男として明治七年（一八七四）に生まれた。姉ヤギ（のち平賀姓）・弟治三郎・妹ヤス（のち堀田姓）の三人の弟妹がある。政次郎は家業の質・古着商に一〇代から携わり、大正一五年（一九二六）から宮沢商会と改めた。堅実な商店の経営者であると同時に熱心な仏教徒で、花巻仏教会や四恩会を作って、講習会などを開いた。町会議員・調停委員・民生委員などをつとめて度々表彰されており、昭和二六年（一九五一）には藍綬褒章を受けた。賢治は盛岡中学校を卒業する前後や、盛岡高等農林学校を卒業する前後に、向学の念やみがたく上級学校への進学を父の政次郎に頼んだが、当時の家族制度の上から、家業を継がせようと思う政次郎はそのたびに許さなかった。信仰をめぐる父と子の対立の原因はそこに根がありそうである。政次郎は、その点では厳しかったが、その反面、賢治が明治三五年（一九〇二）に赤痢で入院、大正三年（一九一四）には鼻の手術のために入院し、手術後

に発熱して発疹チフスの疑いが出たときには、ともに政次郎が看病にあたり、そのたびに病に倒れるということがあった。宗教をめぐる真剣に論争を繰り返して反発したが、賢治が政次郎に対して手紙などによる報告を怠らなかつたのは、一面では賢治が政次郎の経済的な援助を受けていたことによるが、他の一面では、父に対して人間的な信頼を失わなかつたとも言えよう。賢治は大正一〇年（一九二一）一月に無断で上京し、本郷菊坂町に下宿して、ガリ版切りをしつつ国柱会に通うようになるが、この時には四月上旬、父の政次郎も上京して賢治の下宿に泊まり、その後で六日間にわたって伊勢・京都・奈良方面への旅に賢治を連れて行っている。成功は見なかつたが、親子がいっしょに旅をし、また、古い仏教の法灯にふれることにより、親子の融和を願ったものと思われる。賢治は昭和八年（一九三三）に世を去るとき、父に『国訳妙法蓮華経』千部を印刷して知己に配るよう遺言を残し、政次郎はそれを実行している。そして、昭和二六年には賢治の墓を、それまで葬られていた浄土宗の安浄寺から日蓮宗の身照寺に改葬している。昭和三年（一九五七）、八三歳で没。

森荘巳池（もり そういち）

〔概括〕盛岡中学に在学中に賢治の『春と修羅』に感動し、やがて

詩誌「貌」を主宰、賢治の詩を載せた。地元の賢治研究者で、全集の編纂にも参加した。

〔人物〕作家。賢治研究者。本名、森佐一。森荘巳池・森惣一はペンネーム。明治四〇年（一九〇七）、盛岡市生まれ。盛岡中学校卒業。東京外国語学校（現、東京外国語大学）中退。昭和三年（一九二八）に岩手日報社に入社、同一四年には学芸部長の職にあったが退社して、十字屋版『宮沢賢治全集』（昭和一四・一一―一九・二）の編集に従事した。賢治との交渉は大正一四年（一九二五）に、まだ中学生だった森が盛岡中学の先輩の賢治に岩手詩人協会への入会を呼びかけたことに始まる。岩手詩人協会は、この年七月、森の編集で機関誌の「貌」を創刊、賢治はこの号に「鳥」「過労呪禁」の二編を載せている。森は中学時代に、詩集『春と修羅』を読んで「こいつはたいへんだ」と感動したほどの早熟な青年で、賢治の詩「春谷暁臥」に「佐一が向ふに中学生の制服で」「佐一もおほかたそれらしかった」と出てくる。賢治が森に宛てた書簡は全集に二一通あるが、文学や雑誌について本心を語っている。森は昭和一八年（一九四三）に「蛾と笹舟」「山畑」で直木賞を受賞した。十字屋版『全集』以来、全集発刊のたびに編集に参加している。賢治に関する著書に「宮沢賢治」（昭和一一 小学館）、『宮沢賢治歌集』（昭和一一 日本書院）『野の教師宮沢賢治』（昭和三五 普通社）、『宮沢

賢治の肖像』（昭和四九 津軽書房）などがある。

八木英三（やぎ えいぞう）

〔概括〕賢治に童話の面白さを教えた小学校時代の教師。

〔人物〕賢治が花巻川口尋常高等小学校で三年生と四年生の一学期に担任として教えを受けた教師。明治二十年（一八八七）五月五日生まれ。資格は代用教員で、着任したときは一八歳の青年だった。明治三十八年四月に着任し、四〇年二月に早稲田大学の編入試験に合格して東京へ去った。彼の教え方は、授業中にアンデルセンの童話やマールローの「家なき子」などを読んで聞かせたり、校外へ連れて行って野外教育をしたり、疲れると菓子を買って来て食べさせたりにして、極めて自由な雰囲気だったらしい。賢治の花巻農学校における授業ぶりも似通っている。賢治は成人したのちも八木としばしば会っており、ある時、八木に「私に詩眼を開いて下さったのは先生の童話です。私の童話は根本は法華経から来ていますけれど先生の童話の息のすることがお分かりになりますか」と語ったという。八木には『稗貫風土記』（昭和二六・四）という著書があり、このエピソードをはじめ、賢治についてもいろいろと書いている。